

岐阜月朋

ふどうぼく

- 一人の歴史を掘り起こす (山内小夜子) ● コラムしょうしんげ
- 真宗女性のつどい (樫山 正樹)
- 郡上こども夏のつどい ● My Book

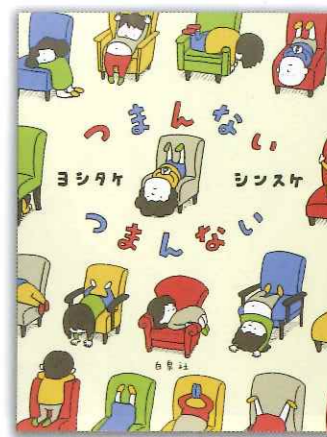
2019.02 120



郡上こども夏のつどい

於・郡上教会

MyBook



つまんない つまんない
ヨシタケ シンスケ
白泉社
¥1,300+税

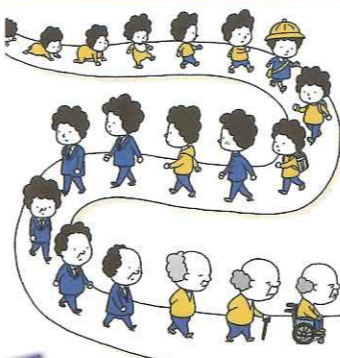
男の子が家で退屈しています。
「なんかつまんない」と。
お母さまも、「テレビもつまんない。」
お父さまも、「つまんないんだだけ」と言いつつ、
「自分でなんとかしてちょうだい」との返事。
「すーっと おなじが、つまんないのかな」と。
それで、座る位置を少しずつ変える。
「あれ、なんかちょっとおもしろい」
自分に関係ないと、つまんな



自分の思い通りにならな
と、つまんないのかな。
世の中、「おもしろい」と
「つまんない」といかな
かな。
日常にある何気ない風景が、
作者の視点からいっぺんかの場
面が、とりあげられていま。
よく口に「つまんない」は、
でもその「つまんない」は、い
からくるのか。
なぜそう思うのか。
それは自分のせいなのか。
絵本の中は、子どもの「つま
ない」ですが、これは大人にも
そのままではまる情景です。



男の子は、最後に父親のこ
ろに行きます。すると父親は、
「どんなつまんないことだっ
て、自分しだいでおもしろく
できるんだよ。」
それに、つまんないことがあ
るから、おもしろいことがあ
しくなるんじゃないの？」
と。
すると男の子は、
「その話は、ごないだも
聞いたから、つまんない」
と一言。
あれ、なんか、私のまわりで
いつ最近、起ったことか、な
情景……。



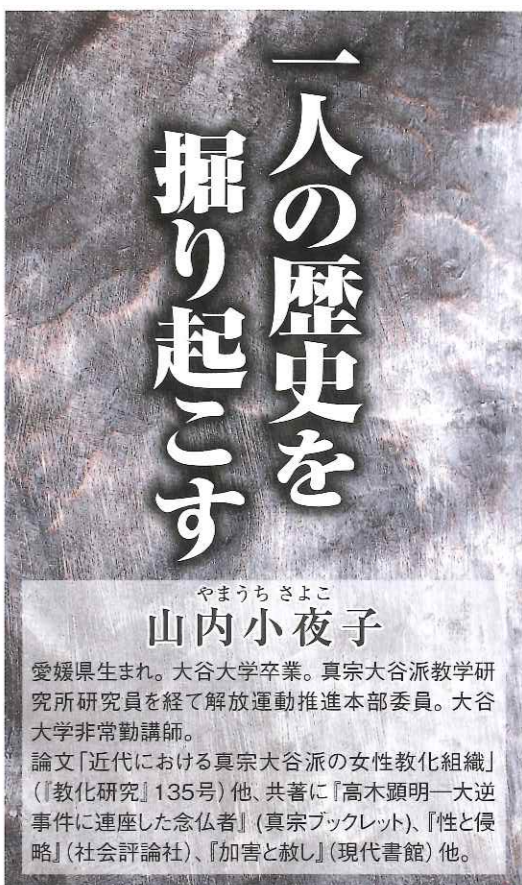
中陰カード
葬儀・中陰中の教化アイテム
1セット 残部僅少
100円
(初七日から七七日、
初月忌の8枚入り)
(ご注文は5セット500円より承ります。)
詳細は岐阜教務所まで。

お文のころ
運如上人の御文のころを訪ねる
1冊 100円+送料 (5冊以上送料無料)
近刊 エッセイ お文のころ
以降 3~4 続刊予定 詳細は岐阜教務所まで。



「お寺って何するところ？」
先日、「門徒さん宅の小学生に
尋ねられ、言葉に詰まった。
普段静まり返った、だだっ広い
境内を有するお寺。
最近、この葬儀はセレモニーホー
ルが主流だし、いいちゃんばあ
ちゃんたちの安らぎの場？で
あったお寺のお参りも少ないし
…。近所に子どもたちの姿も
少なくなり子ども会も消滅し
たまま……。
ただ、「お寺って何するところ？」
の問いに本当はちゃんと答えら
れるはず。
親鸞聖人の教えにいつでも出遇
えるところだ。
まずは、「子どもおつとめ本 正
信偈」(東本願寺出版)で、きっかけ
作りを始めよう。
(小)

編集後記



一人の歴史を掘り起こす

やまうち さよこ
山内小夜子

愛媛県生まれ。大谷大学卒業。真宗大谷派教学研究所研究員を経て解放運動推進本部委員。大谷大学非常勤講師。
論文「近代における真宗大谷派の女性教化組織」（『教化研究』135号）他、共著に『高木顕明一大逆事件に連座した念仏者』（真宗ブックレット）、『性と侵略』（社会評論社）、『加害と救済』（現代書館）他。

名告り

ずいぶん前のことになりましたが、「現代社会における真宗寺院の位置」というテーマで、岐阜県内の寺院に暮らす女性たちからお話をお聞きしたことがあります。現代はさまざまな場面で過度期だと言われていますが、その中で真宗寺院とは？ということも明白なことではなく、その在り方をめぐってはいろいろと模索がされています。模索の中に女性の共同参画は可能なのか。寺院に暮らす女性たちの今の「声」をお聞きしたい。そのような問題関心をもって耳を傾けました。

参加された6名の方々には年代も暮らす地域も違う人たちがしたが、どの人も「坊守」と呼ばれ、その「坊守」とは何者かと、日常の中で問い／問われている方々のように思いました。そしてどの方も、自分の前を歩まれたお姑さんや実母の思い出や、ご自身のこれまでをとっても熱く語られました。

「坊守という届けをする」とすらも知らずに、一生、50年も60年も寺のために身を粉に

一枚の写真から

職と、お葬式とか年忌とか一緒に参りに出させていたかったです。本当に必要に迫られて、勉強もしていないのだけれど、次から次へと寺のことが迫ってきますので、どきどきしながら、なにも解らないまま、「やっていかないとだめや」という心構えもだんだん出てきた。檀家さんたちに助けていただきながら、どうか、子どもも育てさせていただきながら、今日に至りました。無我夢中でした。」(同)

どの方の言葉も、今のご自身の悩みを、前を歩まれた女性たちの足跡を訪ねている、そんな印象を受けました。このような大切な言葉は、残念ながら時には「女性の愚痴」として、軽んじられ、受け流され、文字に刻まれることもあまりなかったように思います。しかしこの女性たちが、実際のところ、これまでのお寺を基底から支えてこられたように思うのです。

この一枚の写真は、1944(昭和19)年5月13日の「臨時女子教師検定合格者得度記念写真」です。敗戦の前年の1944年という時期に、こんなにたくさんの方々が集まり、大寝殿前で撮影された写真です。およそ300人の女性が写っています。それまで表舞台に登場することのなかった女性たちの写真。この写真の背景にはどのような歴史があったのでしょうか。

明治の初め1879(明治12)年4月11日、当時の寺務所庶務課の役員から「一人の女性が得度をして、宗派の学校に入学したいと願っています。女性が僧侶になることは許可されないのでしょうか。布教の任に堪えられる者は住職に推薦してもいいでしょうか」という内容の「伺い書」が出されています。それに対して「その伺いについては、当分は返答することは難しい」とされて、結果として女性の得度



して働きながら、亡くなった時には、坊守としての弔辞すらいただかずに逝かれる坊守さんが今まではいっぱいあったのです。そういう方たちをたくさん見てきたものですから、私自身は教師資格も取らせていただきました。「衆徒です」と名告ることもできなくはないのですが、そういう私たちの先輩の、草深い田舎の寺で、それこそ一生、寺やご門徒さんのために働いたけれども、坊守の名告りさえもせず亡くなつて逝かれた方がたくさんいらしたように思うのです。それを考えますと、坊守の位置とか在り方を、みんな考えていかななくてはならないと思います。」(注①)

また、ある方は前坊守(姑)を偲んで、
「六人も七人も子どもを育てて、戦争中はお寺へのあがりなどほとんどない。おばあちゃんば、田を耕し、畑を作りながら、子育てをしてきた。お

じいちゃんはお寺のことをして、おばあちゃんば労働力としてありとあらゆる仕事をして、生活を支えてきた。それが昔の山寺の坊守だったのです。……寺に帰って10年の間、自分の悩みを何とか解決しなければ、自分自身救われる道は何かと、ご本尊の前で手を合わせることもしばしばでした。」(同)

また、夫である住職を亡くされた方から、
「夫は25年前に亡くなりまして。……すごいショックを受けて、三年ほど立ち上がる事ができないで、お寺を守っていくという意欲が一時なくなりました。……一番心配になるのは、経済の問題でした。なんとか立ち直らせてもらった。というのは、代務者として、実家の住職に13年間法務を務めてもらってきたわけです。その間に、衣を着られるような私ではなかったのですが、得度をさせていただき、代務者の住

2018.9.6

真宗女性のつどい

「真宗の修行は生涯を通しての聞法である」
 そんなとき
 整理のつかない気持ちになる事が
 ありました。
 の反応が多く、なんか自分の中で
 ずいぶん、住職になれるんですか」と
 さんになれるんですか。修行せ
 すると「えっ、修行しなくても坊
 ん」と答えるをえまません。
 との問いには「それはしていませ
 りますと「修行されたんですか」
 ります。修行といえます
 と、一般的には、比叡山の千日回
 峰行とか断食、座禅といった難行
 苦行が思い出されます。そうな
 りますと「修行されたんですか」



うめやま まさき
榎山 正樹

1967年滋賀県長浜市に生まれる。
 1989年大谷大学文学部真宗宗学卒業。
 現在、真宗大谷派名古屋教区教西寺住職。
 宗教教師・保護司・同朋会館教導・准堂衆・本山堂僧。

坊守と女性門徒がともに学びあう場として「真宗女性の集い」が岐阜で開催されました。講師の榎山正樹氏からのお話を紹介します。

「ご門徒さんから、「本山で修行をされたんですか」と聞かれることがあります。修行といえますと、一般的には、比叡山の千日回峰行とか断食、座禅といった難行苦行が思い出されます。そうなりますと「修行されたんですか」との問いには「それはしていません」と答えるをえまません。すると「えっ、修行しなくても坊さんになれるんですか。修行せずに、住職になれるんですか」との反応が多く、なんか自分の中で整理のつかない気持ちになる事がありました。そんなとき

この言葉に出会ったんです。この言葉を聞いた時に、何か胸につかえていたものが、すっと落ちた気がしました。「あつ、これだ」と。真宗門徒の聞法が修行ということから、私も少しずつ深まりが出てまいりまして、そのことをみなさんと、確認させていただきたいと思えます。

修行と申しますと、今申し上げましたとおり、一般的には難行苦行。日常を離れ、自分の日暮らしとは全く違うところで、自らを仏に近づけていく「行」として行うものです。しかし真宗では、聞法ということが修行だと。これは角度を変えてみますと、聞法するということは、場所を選ばないわけですね。我々は在家仏教ですから、日常の暮らしが常にそこにあるわけです。その日常の暮らしの中に修行があるという。よく考えれば、これほどの難行苦行がありますでしょうか。

この行というものを通して、私たちは何をこの身にいただくのかと。そこが大事なわけです。誤解

ある中で聞法するということは、非常に難行苦行であるということとです。そこを押さえて聖人は、「静かにそっと心を落ち着けて、まず聞く」というこの一点を言っておられるでしょう。裏を返せば私たちはなかなか「聞けない」ということです。

「そうは言うけれども」「教えはそうかもしれないけど」と、すぐに我執が頭をもたげてきます。しかし、「聞く」という根本のところをおさえておかないと、何が真実なのかわからなくなってしまふ。したがって聖人は「竊かに以みれば」という言葉を最初にお書きになったのではないかと思います。

私たちが今、真宗の教えに出会えたのは、真宗門徒の修行であり「聞法」をずっと続けてきてくださった先達がいるからです。念仏の教えをひたすら聞いてきた方々が、私のところまで教えを届けてくださっている。そう頂けば、聞法するということの尊さと大切さが、あらためて見えて参ります。

は認められませんでした。これによって江戸以来の「寺院の住職は世襲」という慣習を見直す機会を失ったのかも知れませんが、なにより残念なのは、学校（小教区）という親鸞聖人の教えを学ぶ場へ女性たちが入ることができなかったことです。

その後、1941（昭和16）年4月1日には、「真宗大谷派宗制」を制定し、その中で教師検定を合格した女性の得度が認められます。1942（昭和17）年に4名の女性が得度しましたが、それまでの63年間、女性の僧侶がいない教団としての歴史がありました。

1941年は、日中戦争が泥沼化し、米英を相手にした太平洋戦争が勃発した年です。住職も兵士として召集されて、寺院の経営をどうするのか。戦時対策としての女子の教師資格取得・得度の許可でした。

一人ひとりの歴史を掘り起こす

この一枚の写真にいらつしやる、お一人おひとりの名前を「一人称」で掘り起こしたいと思つていきます。この方たちの後ろにはもつとたくさん私たちの先輩たち

がいるように思います。女性の得度を認めなかった歴史をもつ教団。この歴史を少し大切に考えたいと思えます。その歴史は、冒頭に紹介させていた坊守さんたちの言葉と無関係ではないでしょう。どのような歴史の上に今の私たちが在るのか、歴史に学ぶことは、これからの未来を考えることにながついていくと思えます。

これまでのように女性に教えを聞く側で、説く側から救済される対象としてあるのなら、常に対象としての生を生きざるを得ないように思います。私たち

女性は、救済の対象として教えを聞き、自らもその位置にあらをかいていたのかもしれない。歴史から問われてくるのは、あなたはあなたの主人公ですか、ということではないでしょうか。


「信心を得るとは主体性の回復である」との亡き師の言葉を思い出します。主体性とは、自身の存在の歴史的・社会的な意味を信知し、存在する者の責任を果たしていくことだと教えられました。今、私は、その責任というものは、私までつながった女性たちの念仏を、次の世代の人たちに手渡していく責任のように思います。歴史を訪ね、一度自分のところで確認して、そして次の人に手渡していく。歴史のバトンを繋いでいく、その流れの中に参画するということがとても大事なことだと思つていきます。

しょうしんげ
往還廻向由他力
正定之因唯信心

われわれが浄土に往生すること（往相）も、浄土からこの世に還つて人びとを救うはたらき（還相）も、ともにすべて本願力による。したがってわれわれが救われ浄土に生まれて仏のさとりを開く因（たね）は信心一つだけなのである。

よくご高齢の方から、こんな言葉をお聞きすることがあります。「足腰は痛いし、耳や目が不自由になった。自分でできることが少なくなった。若い者に迷惑ばかりかけるようになったが、この先どうしたものですかね」と。

だれでも歳を重ねることはそのような姿になるのですが、いかなる境遇にあつても、安心して尊く生きていけるための居場所があると知られることが、「信心」のはたらきなのではないでしょうか。



注①「教化研究118号 特集現代社会における真宗寺院の位置Ⅱ」座談会 寺に暮らす女性の視点から」

2018.7.30-31

郡上子ども

夏のつどい



今年も(18年)猛暑の中、無事に夏のつどいを終えました。「あそべー!ほとけの子」をテーマに郡上連合組の若手スタッフ、坊守さんや地元の高校生のご協力のもと行なっております。歴史は長く、昔は八幡町の安養寺で行なっていました。現在は、大和町にある郡上教会を会場に行なっております。日程は一泊二日で、食事やゲーム、人形劇など、内容も定着しつつあります。近年では少子化などもあり定員40名が集まらない年もありましたが、今年はチラシをカラー化したり地元ケーブルテレビでCMを流してもらったことなど結果、満員御礼となりました。今後の課題としては、まだまだ地域の偏りがあるので郡上市の各ご寺院様のご協力を願っています。

帰って少し休憩した後は夕食になります。みんなで外へ出てブルーシートを広げて、食事の準備ができたならばごに食前の言葉を唱和していただきます。坊守さん方に作っていただいたカレーはとても美味しく、みんな喜んで食べ、なかには何杯もおかわりする子も見受けられました。

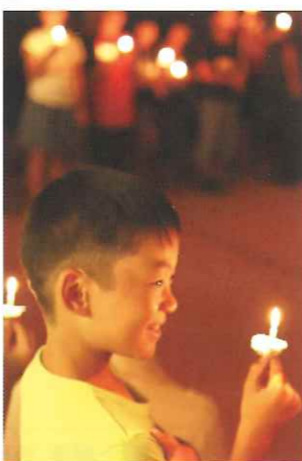
おゆうじや、おあさじでは、ご本尊を前にちゃんと正座をして大きな声でお勤めをする姿や、慣れない低学年の子どもに教えている上級生の姿などはとても感心させられます。



毎年参加している子や初めて参加する子など、いろんな子がいる中、不安な子もいると思いますが、自己紹介をして、一緒にゲームをしたり遊んだりしながら自然と仲良くなっていく様子は、とても微笑ましく羨ましくも思いました。



初日の夕方頃には、近くにある大和温泉やすらぎ館へ、班ごとに、行きはみんなで歩き、帰りはバスでという予定でしたが、暑さもありません、行く時もバスをお願いしました。お風呂は何日かおきに男女どちらかが滑り台のある方になり、子ども達もそのことを知っているのが楽しみにしているようです。スタッフも一緒に入り、他のお客様にご迷惑がかからないように、見えますが、いつも特に騒ぐことなく、楽しく入っています。



順調に日程を過ごして行く中で、中には環境の変化で、テンションが上がリすぎて調子に乗って体調が悪くなったり、夜寝るのが遅くなったりする子もいましたが、今年の子どもたちも「たからもの」をみつけて元気に帰って行きました。来年もまた待っています。

